太田水穂

太田 青丘 著

太田水穂

太田青丘 著

短歌シリーズ・人と作品 14

太田青丘（おおた・せいきゅう）

本名兵三郎。明治42年8月長野県生れ。昭和9年東京大学中国文学科卒。12年まで同大学院在学。国民精神文化研究所助手。教育研修所所員を経て，現在法政大学名誉教授。文学博士。昭和3年歌誌「潮音」入社，現在同代表。著書「日本歌学と中国詩学」，「詩と人生」「唐詩入門」「芭蕉と杜甫」「太田水穂研究」「新短歌立言」「短歌と人生」など。歌集「国歩のなかに」「アジアの顔」「遡源」ほか7冊。太田青丘全歌集。

短歌シリーズ 人と作品 14

太田水穂

昭和五十五年九月　五日　初版発行
昭和六十三年四月二十五日　三版発行

定価　二四〇〇円

著者　太田青丘
発行者　坂倉良一
印刷所　共信社印刷所

発行所　株式会社　桜楓社
東京都千代田区猿楽町一―三―一
電話　二九五―八七七一（営業）
二九五―八七七四（編集）
振替　東京六―一八〇二〇

ISBN 4―273―00515―8　検印省略
Printed in Japan

はしがき

一八七六年（明治九年）、西南戦争の前年に生れ、一九五五年（昭和三十年）数え年八十才を以て死去した太田水穂は、一九〇〇年（明治三十三年）明星の創刊と時を同じうして、郷里長野県下に於て「この花会」を結成して、いち早く新派短歌運動に乗り出し、一九一五年（大正四年）歌誌「潮音」を創刊して、アララギの万葉・写生主義に対立し新古今・芭蕉を継承発展した日本象徴主義を標榜し、これを実作に応用して各々風体を異にする十種の歌集、総計約五千の短歌作品を残した外、三・四十代は専ら評論家として活躍し、四十代後半以後は芭蕉俳諧研究に、古事記研究に、なかんずく日本和歌史論に、創見にみちた幾多の著作を成した。

畢竟するに歌人太田水穂は、同時に評論家であり、また研究家でもあったので、彼に於てはこの三者は全く渾然一体のものとして生きて働いていた。ここに彼の同時代の歌人・文学者中、ユニークな地歩があった。

このうち研究家としての彼の業績については、従来すでに定評に近いものがあるが、評論家としての彼については、文献の不備の為もあったが、必ずしも正当な評価をうけていない。

しかし一般に最も偏した眼で見られているのが、彼の歌人としての位置であろう。これは、

戦前はアララギ中心主義の眼で評価され、終戦直後は左翼の偏見による敵視によって決裁されようとしたし、今日に於てもこの何れかの、或いは両者混合の、惰性を以て見られているところが大であるからである。

以上のような趨勢を考慮して、本文の筆者はなるべく主観を抑制して、水穂その人の言説によって彼の芸術の真の姿を解明しようとした。読者並びに研究者は、一切の先入観を去って、進んで先年完成した太田水穂全集十巻そのものについて考察されるよう希望してやまない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

目

次

はしがき

作家研究編

一、生涯とその文学形成……九
郷里と家系…九　小学校より師範学校時代…一三　初期の詩歌活動…一八　この花会の結成…二一　中間模索時代…二六　潮音の創刊と短歌立言の形成—附　写生説論争…三三　大患と良寛・芭蕉への傾斜…四三　芭蕉会及び芭蕉俳諧の摂取…四五　日本象徴の標榜…五〇　昭和初頭の荒海期—新興短歌との接渉…五九　歌会行脚と潮音経営…六四　古典研究と晩年…六七

二、作風について……七一
諸言…七一　つゆ草…七四　山上湖上…八〇　続山上…八八　雲鳥…九四　冬菜…一〇二　鷺鷺…一二四　螺鈿…一三一　流鶯…一三六　双飛燕…一三〇　老蘇の森…一三三　結語…一三四

三、その他……一三七
俳句と連句…一三七　小説…一三八　評論…一四〇　研究…一四三

ゆく雲を見送るなべに　（一五三）
秀つ峯を西に見さけて　（一五四）
口あきて歌ひてをれば　（一五五）
みそささいまれに来てなく　（一五六）
菜の花にかすみて小さき　（一五七）
さみしさに背戸のゆふべを　（一五八）
星白く夜はさながらに　（一五九）
雲は西に流れて汐は　（一六〇）
水は藍に花みな白き　（一六一）
木槿垣にしろき花見る　（一六二）
夏きたる信濃は麦の　（一六三）
野毛山の異人屋敷に　（一六四）
葦むらをおし靡けくる　（一六五）
霜枯れの山の二つに　（一六六）
父母に手をば引かれて　（一六七）
何をかも夢みてさめし　（一六八）
われ行けばわれに随き来る　（一六九）
この夕べ外山をわたる　（一七〇）
おのづから歩みをとめて　（一七一）

木枯の風に吹かれて　（一七二）
花ぐもりいささか風の　（一七三）
我がよはひ四十路をすぎぬ　（一七四）
ふく風はありとしもなし　（一七五）
農園の昼のしじまの　（一七六）
粟の穂に夕日のいろの　（一七七）
この寺の山岨づたひ　（一七八）
山のいろに簷端ふるびし　（一七九）
鐘が鳴る紀伊の御坊は　（一八〇）
きり削ぎの一枚岩を　（一八一）
豆の葉の露に月あり　（一八二）
戸を明けてすだれの外は　（一八三）
張りかへてみぎりの石の　（一八四）
落葉して庭は冬木の　（一八五）
土のいろに雲はそそけて　（一八六）
野は昼の松の花粉の　（一八七）
青苔の椎のこぼれの　（一八八）
秋の日の光りのなかに　（一八九）
曙の霧のなかより　（一九〇）

冬青き山を軒端に　（一九一）
藤暮れて廊下の外は　（一九二）
青桑の嵐のなかに　（一九三）
屋廂にとまり雀の　（一九四）
みんなみの海のはてより　（一九五）
桜さく島のあらしに　（一九六）
食卓の茄子の漬物　（一九七）
雲ひとひら月のひかりを　（一九八）
ひんがしの天の真中に　（一九九）
東京は九十九日の　（二〇〇）
寒晴の大日坂に　（二〇一）
食べ足りて舌なめずり　（二〇二）
髪あげて人のすずしき　（二〇三）
野をみなみに大霜晴の　（二〇四）
風ふけばおのれ動きて　（二〇五）
くろぐろと暮れはてにける　（二〇六）
まかがよふ光りのなかに　（二〇七）
雲しづかに谷を放るる　（二〇八）
日はしづかに屋上にあり　（二〇九）
ますらをは微賤なりければ　（二一〇）
いづくにかあふれてたぎつ　（二一一）
すさまじくみだれて水に　（二一二）
僧ひとりひる寝してをり　（二一三）
石竹の一つの花に　（二一四）
雷の音雲のなかにて　（二一五）
硫黄湯の石の河原を　（二一六）
むら山の青嶺のおくに　（二一七）
こがらしの吹きよめたる　（二一八）
月すでに白みつくして　（二一九）
朝空のみどりに触るる　（二二〇）
まなく散るさくらの花を　（二二一）
山黒く暮れて涼しく　（二二二）
手をうてば杳けき方に　（二二三）
のぼりゆく高原の秋の　（二二四）
群れくだる矢のしら羽の　（二二五）
ひむがしの玉の宮居に　（二二六）
せみ一つ矢のごとくきて　（二二七）
荒山の冬木の谷に　（二二八）
手に撫づる髪にもしめり　（二二九）
しろじろと花を盛りあげて　（二三〇）
獅子吼ゆるこゑを聞かばや　（二三一）
白王の牡丹の花の　（二三二）

大羽黒ゆらり舞ひきて　(二三三)
日のもとの益良男の子は　(二三四)
関のこゑに送られゆきし　(二三五)
毛茛花五月の水の　(二三六)
簷の端に天そそり立つ　(二三七)
屋びさしに音たててふる　(二三八)
霜に晴れてつばらにみゆる　(二三九)
草はみな虫にかなりし　(二四〇)
またしても啼きそこねたる　(二四一)
何事かありけるごとく　(二四二)
闇のなかに一塊り大き　(二四三)
実朝の去年のみ祭り　(二四四)
誕生日青くあけゆく　(二四五)
高はらの古りにし駅に　(二四六)
たたかひはいづくにありし　(二四七)
命ひとつ露にまみれて　(二四八)
何事を待つべきならし　(二四九)
坂下にむれ遊びゐる　(二五〇)
無限なる時の経緒に　(二五一)
もの忘れまたうちわすれ　(二五二)

作品選……二五三

水穂紀行……二六三

参考文献……二八二

太田水穂略年譜……二九一

短歌索引……一九九

装画　佐藤多持

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

作家研究編

一、生涯とその文学形成

太田水穂は、明治新政権もまだ草創期に属し、佩刀禁止令がくだり、元老院をして憲法を起草せしめるという努力にもかかわらず、熊本神風連の乱、秋月の乱、萩の乱等、一連の反乱（翌年西南の役起る）が頻発するそんな不安定であわただしい明治九年（一八七六）もおしつまった十二月九日、長野県東筑摩郡原新田村で生まれた。本名貞一。父は太田億五郎、母はくり、の最季子で、兄二人、姉三人があった。

郷里と家系

原新田村はその後、町村制施行とともに隣接五ケ村を加え、広丘村と改称、昭和三十四年春、塩尻市に編入された。この広丘村大字原新田は、所謂松本平の南半分のほぼ中央に位し、昔は善光寺街道の一宿場であったが、それも中仙道の分岐点（洗馬又は塩尻）に一・二里の近距離であったので、比較的交通の便には恵まれていた。今は中央線が通じ、原新田区内に広丘駅

（塩尻駅の次、松本駅の二つ手前）があり、他に役場、小学校、郵便局等を擁し、広丘村の政治上・教育上・交通上の中心部をなしている。

このあたりは地質学上いわゆる沖積層に属し、水田と畑と松林（今は開墾されて昔の面影を止めぬまでになったが）とより成る海抜六百七十米程度の平野で、西の村境には犀川の一源流たる奈良井川が走り、その向うには乗鞍・穂高・槍・大天井・常念・燕・白馬等のいわゆる日本アルプスの三千米前後の諸峯が屏風を建て連ねたように万年の雪を頂いて天際に聳え立っているのが望見される。信州人に多少とも精神的高遠を追求し一片の稜気の磨すべからざるものがあるとするならば、その根源はひとえにこれらの諸峯の存在に帰せらるべきものであったので、水穂の夢寐にも忘れることのできなかったのもこれら諸峯の雪の輝きであったであろう。

秀つ峯を西に見さけてみすず刈る科野のみちに吾れひとり立つ　つゆ草

霜に晴れてつばらにみゆる山脈のはるけき方に雪をもとむる　螺鈿

東は、鉢伏・茶臼・王ケ鼻・袴越等の鉢伏山脈が、西の諸峯とは全く異ったなだらかな母性的曲線をもって、この高原の村々を囲み、その間に点綴される春夏秋冬の眺めは幼い水穂の詩心を育むに十分であったろう。

ふるさとの木戸より見れば一平麦にげんげの花ざかりなり　雲鳥

豆の葉の露に月あり野は昼の明るさにして盆唄のこゑ　冬菜

あざみの花ばら卯の花もこき入れて野川の流れ田に落ちてゆく　螺鈿

銀いろの茅花の風のふく野辺にわれまだ顔も黒き子なりし　螺鈿

太田家は、太田道灌の一族が信州へ落ちのびた者の子孫と言い伝えられ、古戦場を以て名のある桔梗ケ原近傍一帯の開拓に努めて、代々農を業としていた。

父上はつね云ひましき源三位頼政は己が祖先なるぞと　老森の森

さもあらむその歌の血の統流の名残りの末のわれや水穂ぞ　老森の森

明智族出陣千句を閲し終り涙ながれてとどまるを知らず　老森の森

源三位頼政は清和源氏より出で、その子孫に太田道灌を有し、明智光秀もまた清和源氏として頼政の曾祖父の代には一つの血筋の家柄であって、共に時の政権への反逆者として多分の反骨を有していた反面、戦場においても諷詠を忘れなかった風雅の士でもあった。水穂が果して道灌、ひいて清和源氏の血脈をうけたか否かは、ここに問うところでない。水穂の精神生活のどこかにそんな意識が流れていて、このことが、時代一般の写生短歌の流行に対立して自らの道を邁進した水穂後年の行実と一脈相通ずるところがあることを言えば足りる。

父億五郎は非常にまじめな努力家であって、「学問と云へば気狂ひじみる位好き」で、また

「文字が上手で、村の手習師匠などもした」ことがあり、水穂はこの父から「孝経と大学」を教えられた。その性格を物語るものとして水穂が自記するところに拠れば、学校で使う読本が終って次の巻が必要であるのに、その読本がその朝までに買ってなかったといって泣く少年水穂を見ては、二里余りある松本まで未明に出かけて、「それを学校へ行く時間までに購って来てくれ」る人であり、又大雪が降って小学校へ行く道が埋まってしまったといえば、凡そ十丁もあろうという道を「大雪を一人で掻き除けながらその学校へ伴れて行ってくれ」る人でもあった。（生ひ立ちの記―全集第十巻思ひ出の記所収）

水穂の好学の精神と努力の気質はこの父からうけるところが大であったと思われるが、更に歌人水穂の誕生を考える際に忘れてならないのは、この父が幼い水穂を膝にかかえて炬燵にあたりながら、くりかえしくりかえしよく百人一首の歌を歌ってきかせてくれ、やや後年になっては、芸術家などという言葉を知らなかったのであろう、「お前は何でもよいが、歌よみみたやうなものになれ」と云ったことが頭のどこかに泌みこんでいて、これがこの道に耽り入る上の一つの暗示になったということである。（還暦を機会に―全集第十巻思ひ出の記所収）

これに反し、母くり（同じ松本平の塩尻村中条の川久保氏の出）はどちらかといえば才気渙発の人で、「学問よりも行儀、行儀よりも人目の方」を重んずる実際家でもあったようである。（生ひ立ちの記）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook